

# ランドスケープ熊本 だより

日本造園学会 熊本地震復興支援 ニュースレター

Vol.1

2017年4月1日発行

企画・編集

(公社)日本造園学会  
熊本地震復興支援調査委員会

## 創刊号

巻頭写真

上 / 南郷谷から阿蘇五岳を望むもの (2016.5.4)  
下左 / 復興への思いを込めた地域手づくりの  
感謝祭、南小国町黒川温泉 (2016.10.1)  
下右 / 水前寺江津湖公園 (2016.8.8)

## 目次

- p1 発刊挨拶  
池邊このみ
- p2 集落景観の継承とその手がかり  
柴田祐
- p3 熊本地域の自然環境と災害履歴  
にみる伝統的農地管理の価値  
入江彰昭
- p4 都市公園利用実態共同調査報告  
村上修一
- p5 「風景の復興」  
ランドスケープ遺産の継承  
藤田直子

次につなぐ風景と文化  
福井亘

- p6 農業支援・農地等  
復旧ボランティアの役割  
朝廣和夫
- p7 阿蘇くじゅう国立公園復興レポート  
町田怜子
- p8 笑顔あふれる風景のために  
徳永哲
- 今回の復興だから、できること  
田畑正敏



## 発刊のあいさつ

熊本地震復興支援調査委員会 委員長 池邊このみ

熊本地震から、すでに1年がたとうとしています。今回、熊本地震復興支援ニュースレターを発行するにあたり、「復興」とは何かを改めて問い直したい。東日本を含め、現在進められているのは、reconstructionであり、revivalには、ほど遠いのではないのでしょうか。ランドスケープの分野では東日本でも狭義の造園分野の支援に留まってしまっています。熊本の場合には、山、森林、農村、水源、文化財など複合的な問題が生じ、我々の分野が本来の力を発揮すべき場面が多くあるはずで、ニュースレターを通じて、本来の復興に向けた学術・実務の連携の取り組みが、熊本の皆さまに届くことを願っています。

日本造園学会 熊本地震復興支援調査委員会では、「公園緑地」「農業支援」「集落景観」「自然公園」「ランドスケープ遺産」などの視点から調査・活動を実施してきました。このニュースレターは、これらの成果を踏まえたランドスケープの価値やその重要性について、復興の現場に必要な情報をお届けすることを目的に作成したものです。それぞれの分野の復興のプロセスで役立てて頂けると幸いです。

なお、ここに掲載しきれなかった詳細な調査報告や専門的知見はwebページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。今後も復興の現場からのご要望にお応えできるような調査を進めていきたいと考えております。皆さまからの多くのご意見や感想をお待ちしております。

U R L : <https://recovery-jila.wixsite.com/kumamoto-landscape>  
E-mail : [kumamoto.recovery.jila@gmail.com](mailto:kumamoto.recovery.jila@gmail.com)

企画・編集：(公社)日本造園学会熊本地震復興支援調査委員会

委員長：池邊このみ

副委員長：朝廣和夫

幹事：武田重昭

委員：荒金恵太 / 石原凌河 / 入江彰昭 / 恵谷真 / 北橋義明 / 柴田祐 / 篠沢健太 / 新保奈穂美 / 田中誠 / 田畑正敏 / 堤八恵子 / 徳永哲 / 平松玲治 / 福井亘 / 藤田直子 / 町田怜子 / 水内佑輔 / 村上修一 / 森口俊宏 / 渡辺貴史

発行日：2017年4月1日

構成：新保奈穂美

デザイン：井上陽水

印刷：(株)三友社

## 集落景観の継承とその手がかかり

柴田祐（熊本県立大学）



左 / 益城町 (2017年3月)    右上 / 益城町 (2017年2月)  
右下 / 南阿蘇村 (2016年8月)

熊本地震から1年が経過しようとしています。これまでの震災に比べて遅いと指摘されることもあった被災家屋の解体・撤去もかなり進捗しましたが、それでもまだ全体の半分程度で、まだまだこれからというのが被災地の現状です。そのような中、集落景観についての話題を持ち出すのは時期尚早との批判もあるかと思いますが、解体・撤去の途上の現段階だからこそ、問題提起させていただきたいと思います。

地震により住宅だけでなく、納屋、神社やお寺、お墓、農地や水路、擁壁や畦など、集落の中のありとあらゆるものが壊れ、集落景観が大きく変貌しました。そして今、被災家屋の解体・撤去が進むにつれて集落内に更地が増え、また大きく景観が変わりつつあります。ある集落でお会いした住民の方は、集落を離れて仮設住宅で暮らしておられ、久しぶりに帰って目の当たりにした集落の変貌ぶりに、なんとも言えない大きな喪失、寂しさを感じておられました。そのような中で、地震の前には当たり前にあった馴染みの景観を偲ぶことができるのが、生垣や庭木といった緑や、

擁壁の石垣などです。いわゆる公費解体の対象にこれらが含まれていないことが幸いしたといえます。

今後、集落ごとの復興まちづくりの議論が本格化しますが、集落景観の継承に向けて、例えば、みんなで「まち歩き」をしながら地震の前には当たり前のもので見過ごしてきた馴染みの景観の手がかかりを探ることからはじめてみてはどうでしょうか。集落ごとにその手がかかりは異なるとは思いますが、そのものの保存・継承につながるだけでなく、集落の景観の見直しや、それを踏まえて再建する住宅のデザインを検討することにもつながると思います。

長年育まれてきたその集落らしい景観は、一度失われてしまうと二度と取り戻すことができません。阪神・淡路大震災の際には、地震から2、3年後あたりから、町がピカピカにきれいになったことに対する違和感を訴える住民の方々の声が被災地の各地で聞かれました。同じことを繰り返さないためにも、当たり前にあった景観の名残がわずかでも残っているのであれば、それを手がかかりとして、集落景観の継承から復興まちづくりを考えてみませんか。

## 熊本地域の自然環境と災害履歴にみる伝統農地管理の価値

入江彰昭（東京農業大学）

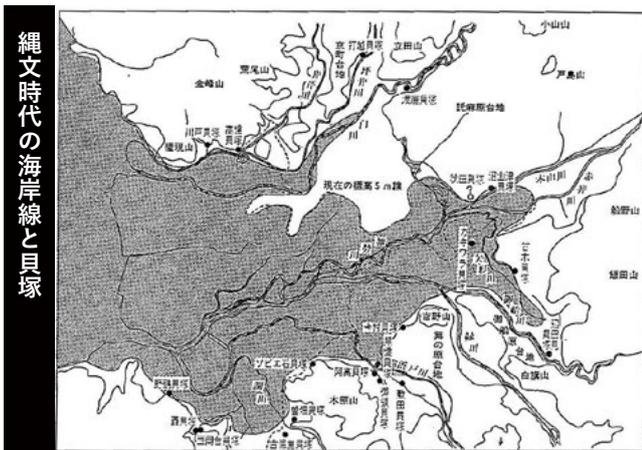
平成 28 年 9 月 12 月、現地を歩き、河川堤防や橋脚周辺の地盤沈下による傾きや段差、地盤に矢板を差し込み盛土造成された家屋の傾きや倒壊等に圧倒されましたが、家屋の庭先のあちこちで湧水がみられ、水の豊かさに感動しました。その湧水は、東海大学市川勉博士らによると白川上流部の阿蘇山や阿蘇西麓台地、中流域の大津・菊陽町水田地帯からの浸透によって地下水が酒養され、下流部の水前寺・江津湖周辺で湧水として地上へ噴出することが明らかにされています。また益城町史によると縄文時代では現在の標高 5m 線まで海が入り込み、江津湖や木山川の九州自動車道付近までの熊本平野の大部分は海であったことが貝塚の分布からもわかり、当時の海岸線辺りと湧水地が重なっています。

そこで上・中・下流の白川・緑川・菊池川流域圏域で自然環境および土地利用をとらえてみると、三方、山に囲まれた地勢により河流はいずれも東から西へ流れ、年間降水量 3,000mm 以上の阿蘇カルデラが水盆となり、平野部に豊富な地下水・湧水となる生態系のサービスをもたらす一方で、白川周辺は砂・砂礫地質が多く、梅雨・台風時の洪水・土砂崩れを引き起こしやすいことが推察されます。

阿蘇熊本地域では、先人たちが豊かな水の恩恵を享受しつつ、一方で自然災害と向き合いながら、野焼きなどの二次草原、山間地の棚田、湧水や井出を活かした水田などの農の営みによる伝統的農地管理がなされてきました。

災害資料及び伝承文化による熊本地域の災害履歴をみると明治 22 年熊本地震は水島貴之氏によって詳細に記録されていた熊本明治震災日記は熊本市都市政策研究所により現代語訳（2016 年 12 月発行）され、過去に学び伝承されていく貴重な災害資料といえます。さらに明治 40 年前後、昭和 8-12 年、昭和 50 年代にまとまった地震がみられ今回の平成 28 年熊本地震同様にいずれも震源の深さが浅く、極浅発地震の場合、震央上の地表への影響が大きく局地的な被害となる可能性があると考えられています。熊本県内には主に災害に関する俚言が多数残されています。東日本大震災での「津波てんでんこ」の先人の教えがいかにされたように、減災教育上の地域の伝承文化は重要に思えます。

熊本の都市形成史にもみられるように昭和 50 年以降の土地利用の変遷をみると、下流域の水田、中流域の畑、上流域の牧野の減少が著しいことがわかります。都市的生活ではその土地の風土やかつての災害を忘れがちになりますが、熊本の風土を知り、過去の災害履歴から学び、自然を活かした人の営みの伝統的農地管理の価値を探ることは、故郷の風景の創成や地域防災マネジメント上、多くのヒントがあるように思えます。今後、さらに地震・大雨洪水・土砂崩れ等の災害履歴と土地利用変化を解析し、熊本地域の自然条件に適応した伝統的農地管理の環境的価値、防災・減災的価値を探っていきたいと思います。



### 熊本県の天気俚言（主に災害）

- ・夜、キジが鳴くと地震になる。
- ・カニが多く陸のほうへ上るときは殊によると津浪。
- ・トンボが群がり飛ぶのも暴風の前。
- ・蟻が列をなしてしきりに往来するときはやがて大風が来る。
- ・蟻が穴をふさぐは大雨。
- ・釣れた小魚が砂を含む時は出水。
- ・川柳が直立する年は洪水。
- ・南瓜のつるの多い年は大風。
- ・梨の花が多く咲いた年は風が多いか大水。
- ・土用後に櫛の若枝がはえると秋になって暴風。
- ・雨にのぼし風（南西風）が加われば大洪水。
- ・阿蘇の岳嵐。中岳噴火口辺りから雷聲のようなうなりを伴って宮地方面に吹き降ろす突風がある。
- ・阿蘇の煙が北へなびけば雨となり、南へなびけば天気が良い。
- ・温泉岳の麓に女の腰巻のように雲がかけたら雨となり、阿蘇では山頂に頭巾をかぶったように雲がかけたら雨となる。

### 参考文献

- 1) 水島貴之（明治 22 年 10 月）：熊本明治震災日記
- 2) 熊本測候所編（昭和 24 年 3 月）：肥後の風土誌
- 3) 熊本測候所（昭和 27 年 10 月）：熊本県災異誌
- 4) 熊本地方気象台（昭和 41 年 10 月）：熊本災異誌 Part2
- 5) 熊本地方気象台（平成 2 年 2 月）：熊本県の気象百年 熊本地方気象台創立百周年記念
- 6) 市川勉（1998）：熊本地域における降雨と地下水位、湧水の関係について（1） 水利科学 239 号 p 1-17
- 7) 益城町史編さん委員会（1999）：益城町史
- 8) 熊本市都市政策研究所（2014）：熊本都市形成史図集
- 9) 熊本市都市政策研究所（2016）：熊本都市形成史図集 - 戦後編 -
- 10) 熊本市都市政策研究所（2016）：水島貴之著 熊本明治震災日記【現代語訳】

## 都市公園利用実態共同調査報告

村上修一（滋賀県立大学）

今回の地震では、熊本市内の公園が、一時避難場所としてだけでなく、炊き出しや宿泊など様々な用途に利用されました。利用実態を記録し教訓として共有することは、今後の公園のあり方や地域の防災対策を考える上で、とても有意義であると思われます。そこで、右表の各団体の協力のもと、熊本地震都市公園利用実態共同調査を実施しました。同年8月7日から9日までの3日間、市内33公園を対象として、自治会長さんや公園愛護会長さんをはじめ、日頃から公園の運営管理にご尽力頂いている方々に、ヒアリング調査を行いました。質問項目は以下のとおりです。

1. 平常時の公園と愛護会・自治会等の状況、事前の防災準備（日頃の公園の特徴、愛護会等の状況、防災に対する準備の状況）
2. 地震発生時の行動（前震と本震、日時、交通手段、行動内容、場所、目的、公園や避難者の状況）
3. 公園における避難地形成の過程（避難車両の進入状況、避難のためのテント設営、避難の理由）
4. 避難地としての使われ方（情報収集・伝達、救援・医療、ライフライン、運営組織、防災施設）
5. 公園内施設の使われ方（防災目的ではない通常の公園施設が避難・救援等において、どのように利用されたか）
6. 老人憩の家、公園内集会所の使われ方（使用の有無、使用内容、時期、関連事項）
7. 行政や他の避難所との連絡・連携（市役所・区役所との連絡・連携、隣接の学校等他の避難所との連絡・連携）
8. ふりかえり（事前の防災準備、公園の災害対応性、防災施設や老人憩の家等、共助活動への地域住民の反応、市の対応、公園が災害対応の機能を高めていくための留意点）

強い余震が続く中、もっとも身近な避難地として、公園が様々な役割を果たしたことがわかりました。一方で、その役割をさらに強化するための課題も浮き彫りとなりました。今後、さらなる分析や関連調査への展開をはかり、地域防災における公園のあり方を検討して参ります。

調査主体	
熊本市都市政策研究所	中野啓史, 加藤壮一郎
国土交通省 国土技術政策総合研究所	荒金恵太
(一財)公園財団	平松玲治
九州大学	藤田直子, 小林秀輝, 板垣早香, 馬晨, 唐明暉, 坂根一浩, 土田亮, 河合甫乃香, 三輪柚佳里, 柳あかね
滋賀県立大学	村上修一, 安藤希恵, 濱田恭平
大阪府立大学	武田重昭, 竹村遼大
(公財)都市緑化機構 防災公園とまちづくり共同研究会	手代木純, 小島久子, 鈴木綾
大都市都市公園機能実態 共同調査実行委員会, (一社)日本公園緑地協会	霊山明夫, 唐澤千寿穂, 恵谷真
熊本市	長和史



右写真：  
自治会長さんと公園愛護  
会長さんへのヒアリング  
の様子  
(国府公園, 2016年8月  
9日)



左写真：  
170人が避難所として  
滞在した公園内の公民館  
(泉ヶ丘公園, 2016年8  
月8日)



右写真：  
発災直後の物資供給に  
活用された防災倉庫  
(蓮台寺公園, 2016年8  
月7日)

## 「風景の復興」ランドスケープ遺産の継承

藤田直子（九州大学）

「風景の復興」を考えたことがありますか。暮らしの風景は日々少しずつ移り変わっていくものではありませんが、どの地域にも固有の景観資源や将来に向けて継承したい風景が存在します。そのようなものは「ランドスケープ遺産」<sup>1)</sup>と呼ばれ、研究が行われています。

わたしたちは熊本地震で被災した地域に住む人々の風景に対する思いを調査し、将来に継承していきたいランドスケープへの意識や、無意識のうちにそれらを消失しているかもしれないという現状を調査することで、熊本地震の被災地における日常風景の変化とランドスケープ遺産の継承を明らかにする研究を進め、いくつかの結論を導きました。

ランドスケープは単に美しい風景の一場面を切り取ったものではありません。そこには暮らしや価値観や地域の将来像

が映り込んでいます。景観には「変わっていくもの」と「守っていくべきもの」があり、前者は地球の活動（地震による自然災害そのもの）が該当しますが、後者は復旧作業上緊急性を要する人工的な改変が行われた場所などが該当します。前者は変化を許容していくものですが、後者は然るべき時に元に戻す必要があると考えます。そうしなければ、暮らしや価値観や地域の将来は取り戻せないからです。しかし現実には、被害の大きかった地域の人々はまだ景観について考える余裕のない日々を送っており、それは至極当然です。だからこそ、わたしたち研究者が地域とともに風景の復興に携わり、地域の将来を共に考えていかなければならないのです。

参考文献

1) 赤坂信・平澤毅・高橋靖一郎(2007):特集「近代ランドスケープ遺産の価値とその保全」について:ランドスケープ研究 70(4), 255.



ヒアリング調査で得たデータは、論文だけでなく絵本としても形に残しました。近いうちに南阿蘇で原画展を開催予定です。

## 次につながる風景と文化

福井亘（京都府立大学）

日々の生活の何気ない「風景」や「景観」は、多くの方が目にする「場」です。これは普段の日常の生活に加え、先祖より繋いできた「場」や「物」が時間をかけて創り出してくれています。この長い時間の軸で作られたものは、「文化」として醸成され、生活の中に空気のように存在し、意識さえしていないものも多くあります。しかし、そこにあって当たり前風景や景観、物が喪失や変化をした時、初めてその「場」は、自分の生活に溶け込んでいたものだと気づかされ、紡いできた文化も切れてしまった気がしてしまいます。普段生活していた場が、熊本地震の揺れる回数ごとに壊され、喪失されました。しかし、私たちは培ってきた風景や景観、文化をここで途切れさせずに、これからも継続し、模索し、無くなってしまったものには新たな風景や景観、文化を新旧合わせて導き出す力も持っています。とはいえ、まず人の命を守れる環境ができたうえでの風景や景観、文化の復旧となり、そこから次の世代へも繋げていける場へ進むべきではないでしょうか。

次につながる風景と文化。私は、三つの環境項目が有ると考えています。「人文」と「自然」と「複合」の環境です。人文は、文化財や街並みなどの歴史や文化。自然は、山々や川などの風景や景観。そして複合は、農林業や里地・里山。それぞれに大切なものです。次の世代へ誇れるような場の復旧と復元、創出をゆっくりと進めていけるような発信をできればと思います。



熊本大神宮・十六軒櫓（絵：福井亘）

## 農業支援・農地等復旧ボランティアの役割

朝廣和夫（九州大学）

### ■農ある暮らしの危機と復興の課題

地域により差はあるものの全体的に農林業経営は厳しく、集落の人口減少、営農者の高齢化、後継者不足は深刻です。2016年4月の地震に加え6月の豪雨により、多くの農地、水路等に被害がありました。復旧の遅れにとどまらず、復興そのものを諦める事例も散見されます。

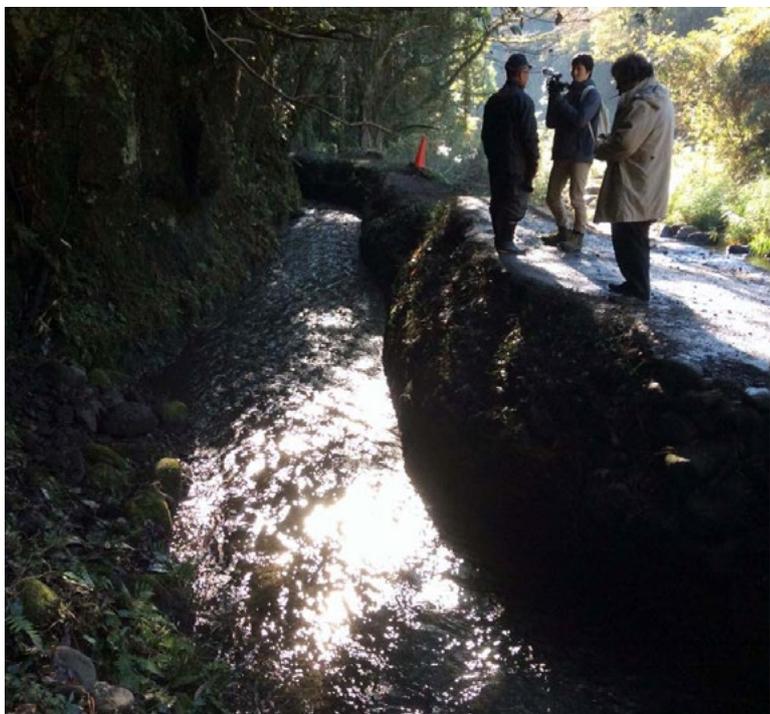
### ■制度による復旧支援

農地・農業用施設の被害の復旧について、工事費が40万以上のものは国の災害復旧事業の対象となります。40万以下については、平成28年熊本地震復興基金の第一次配分（2016年12月～）において「農家の自力復旧支援（農地整備課）」3.5億円が計上され、「被災した農地を自ら復旧する農家（補助率：1/2）」を対象とし、各市町村で調査・復旧が進められているところです。自家復旧をなされている農家さんは、工事の事前・事後の写真と、見積もりなどの保管をされておくと、対象とできる可能性があります。

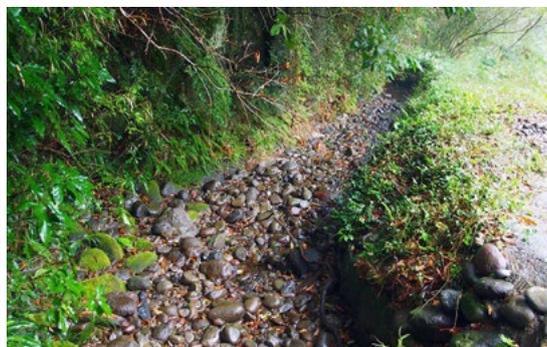
### ■ボランティアの力

しかし、復旧には多くの課題があります。災害箇所が多いこと、業者や重機のオペレーターが不足すること、自己負担に二の足を踏む農家さんも少なくないこと、道路・橋の復旧が遅れ農地に手を付けられないなどです。ぜひ、ボランティアの力の活用も検討してください。

農業支援については、西原村百姓応援団の活動事例があります。農地・農業用施設の復旧支援は、補助事業対象外の個所、補助事業後の作業などを対象とすることが考えられます。2016年12月3日には、ふるさと発復興会議で、御船町の八勢目艦橋付近の井手の復旧作業を40名のボランティアで行いました。3月からは山都町でも棚田の法面の復旧活動を行います。情報はFacebook（山都町棚田復興プロジェクト）の頁で閲覧できます。また、九州北部豪雨の事例ですが（「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」）の頁も参照ください。QRコードでもダウンロードいただけます。



御船町・事後（2016年12月3日） 写真提供 河井昌猛



「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」  
ダウンロードはこちらから  
<https://goo.gl/25MABK>



## 阿蘇くじゅう国立公園復興レポート 「ランドスケープとふるさと学 震災時こそ阿蘇の自然、農業をみつめる草原学習」

町田怜子（東京農業大学）



左 / 国立公園，草原を教育素材にした環境学習（高森東小中学校，2016年9月） 右上 / 草原の野の花観察（高森町，2016年10月）  
右下 / 中学生との対話による学習（高森東小中学校，2016年9月）

熊本のシンボル・県花は、阿蘇の草に咲くリンドウです。熊本地震から半年経った2016年10月、熊本地震後の草原で、紫色の凛とした美しいリンドウを見つけ笑顔になる子ども達の姿がありました。

私は、2014年から南阿蘇の小学校、保護者、NPOの皆さんと協働で草原学習を実施してきました。2016年熊本地震後は、どんな草原学習が実施すべきなのか、NPO法人阿蘇花野協会、高森東小中学校、両併小学校の先生と何度も話し合いをしました。

そして、2016年7月、高森東中学校の先生から「高森東中学校3年生の子ども達は、自分達が農業を受け継ぎ、ふるさとを守っていくという気持ちが強くなっている」というお話を伺いました。高森東中学校の3年生は1年生の時からふるさと学を学んできました。その子ども達が震災時こそ阿蘇の自然、農業をみつめる草原学習の重要性を教えてくれたのです。

そこで、9月に東京農業大学学生と草原学習を実施しました。草原学習の内容は、①阿蘇の草原と農業、人の営み、②都市住民が阿蘇の宝、例えば国立公園や世界農業遺産に指定されている風景、草原堆肥による野菜、無農薬のお米等に惹かれて農作物を購入していること、③草原保全（野焼き、輪地切）で培われている地域コミュニティ力、都市住民（ボランティア）との絆を教育素材としました。阿蘇地域外の東京の大学が、阿蘇の子ども達に「ふるさと学」を伝えるのは少し矛盾があるかもしれませんが、しかし、子ども達は、東京からきた私たちが阿蘇の魅力、草原の魅力伝えることで、ふるさとの魅力、宝を再認識してくれました。

高森東中学生には対話型のプログラムとし、中学生が自ら対話の問いを設定し、「なぜ、阿蘇の植物を守りたいのか」という問いを導きました。この対話では、阿蘇の野の花をシンボルにした地域づくりと情報発信方法について話し合い、11月に子ども達が高森町活性化の提案として高森町に発表してくれました。大変心強い姿です。

そして、東京では、熊本地震直後に、東京農業大学と協力連携している成城幼稚園の先生、保護者の皆様が「子ども達のために」と募金活動や多くの歯ブラシを寄付してくださいました。2017年2月、梅ヶ丘天使幼稚園では、子ども達が描いたイラスト入りの阿蘇の商品をバザーで出展する等、熊本地震発生からもうすぐ一年たちますが、首都圏でも熊本・阿蘇を応援している人々は今も沢山います。東京にいる人々が「熊本・南阿蘇の皆さんのために何かしたい」というアクションは、草原保全・草原学習で培われた交流を通じ、阿蘇グリーンストックや、両併小学校校長先生、女性農家の皆様がつないてくださいました。まさに阿蘇のランドスケープがつかない復興の輪でした。

ランドスケープは風景、自然、文化、暮らしをトータルで捉える学問（進士1999）です。ランドスケープの視点から、ふるさとの自然災害を乗り越えてきた知恵や暮らし方を解析すると、その土地で自然と共に暮らすヒントが見えてくると信じています。また、地震後も力強く咲く阿蘇の野の花、そして、阿蘇の野の花や農業、風景等ふるさとの宝を見つけ、ふるさとと向き合う子ども達の姿は復興の大きな力になると確信しています。

## 笑顔あふれる風景のために — ランドスケープにできること —

徳永哲（黒川温泉環境計画アドバイザー）

### ■農ある暮らしの危機と復興の課題

阿蘇郡南小国町に、熊本地震をきっかけに拠点を移してランドスケープ（風景づくり）の仕事をしています。20年近くお手伝いしてきた黒川温泉を含む地域の活性化に向けて、ランドスケープの仕事の本領を実践的に発揮する時だと考えたからです。I ターンのヨソモノでも、いつも忘れてたくない3つのキーワードがあります。

#### 「生き生きさせる」

田舎はのどかでいいね、という一面的な視点では風景の表層しか見えず、耕作放棄地や放置空き家などの影の部分にはスポットが当たりません。地域の方々が協力し合って行う手入れ（草刈りや井手さらえ、野焼き等）の積み重ねの上に風景の価値があることを、いつも現場で再確認して、環境と地域経済が両立して結果的に風景も人も「生き生きする」ためのロードマップを提案して実例をつくっていくこと。

#### 「枠を超える」

農業・観光・商工業、民・産・官・学など、様々な立場や専門領域とも課題解決のテーブルを共有してそれぞれの持ち味を引き出していく役割を遠慮せずに果たしていくこと。



地域総出での草刈り等により再生された古道  
（南小国町瀬の本高原，2016年10月1日）

#### 「みんなであゆむ」

被災された地域の集落や地区には、助け合う文化や暮らしの知恵がたくさん残っています。この復興の機会にこそ、コミュニティの輪の中でその力を太く強くしていくこと。

ふるさとに誇りをもった笑顔あふれる風景が、どこまでも続きますように。

## 今回の復興だから、できること

田畑正敏（日本造園学会九州支部副支部長）

待ちわびた夜明けとともに見えた傷んだ姿に心を痛めたお城、そして励まされたお城。その城を築いた偉人は、単に城をつくっただけではないことを、この地に暮らした者は知っています。

隈本を熊本に改め、城下町を整え、白川や坪井川などを付け替え、江津塘を築き、広がった安全で安心な土地に井手を巡らせ農地を広げ、小麦で貿易を行うなど、新しい価値を創造しました。400余年後の今も、幅広い杉並木は鉄道と道路が通る現役のインフラで、その先の阿蘇へ越える旧街道は、震災後のライフラインとして欠かせません。

受け継いだ歴史のなかで暮らし、営みを積み重ねてきた結果が、いまの熊本らしさで、その目に見える景観や風景がランドスケープです。熊本で生きた者が、そこから受けた恩恵ははかり知れず、他には存在しないかけがえのない資産です。

その継承は苦難の歴史でした。最後の内戦で城下町と天守を焼失し、明治の地震で城は崩れ、空襲で再び市街地を焼失、

大水害で壊滅的な被害を受けました。私たちはそのたびに復興を繰り返してきましたが、熊本らしい・熊本にしかないランドスケープを大切にすることができたでしょうか。とりかえしがつかないこと、あの時にしかできなかったことはなかったでしょうか。未来への礎として十分だったでしょうか。暮らし営む者が自らの意志で参画し、その記憶を子や孫に継承することができたでしょうか。

今回の復興では、かけがえのないランドスケープを継承し再生するとともに、新たな価値を創造する、そして、わがまちのために自らできることを持ち寄って参画し継承することが大切であり、できると思います。これは、今の私たちにできるこれまでへの感謝の気持ちでもあり、その気持ちが集まって、お城は復興のシンボルになっています。私たちが受け継いできたランドスケープは、新たな価値として創造的に復興して、未来の資産として引き継がなければならないと思います。